



# 雑文集



小野ユージン

## 邪馬台国について

---

以前NHKで、邪馬台国は畿内にあったのか九州にあったのかをめぐる論争を検証した番組をやっていた。

そこでは最新の考古学の研究成果と、「魏志倭人伝」という通称で呼ばれている史書中の記述を照らし合わせて、畿内説と九州説、どちらの説が説得力があるかを考察していた。

畿内と九州、それぞれの地域の研究成果と「魏志倭人伝」中の一部分の記述とが上手く整合性がとれていて、その限りではどちらの説もそれなりに説得力があった。

だが、どちらの地域も、倭人伝の一部分の記述と一致しているだけで、倭人伝全体の記述を説明できるだけの研究成果はあがっていなかった。

それからしばらくして、古書店で立ち読みをしていたら、「魏志倭人伝」は実際に日本にやってきた人物がそれを記述したのではなく、当時の日本社会についての伝聞を後世の人がまとめたものだという記述を目にした。

以上2つのことから、1つの仮説を立てることができる。

邪馬台国とは、どこか特定の地域を示しているのではないのではないか。

当時の西日本各地域の伝聞を、邪馬台国という1つの国の出来事として記述したのではないか。

畿内と九州、それぞれの考古学の研究成果と倭人伝中の記述が一致しているのは、倭人伝の当該箇所が、それぞれ畿内と九州についての伝聞を記述したものだとなれば説明がつく。

中華意識の強い中国人にとっては、東方の小さな島国のことなど詳細に記述する必要はない、いろいろな地域の出来事を1つの小国家のこととして記述しておけば充分だと考えたのではないだろうか。

先のNHKの番組では、邪馬台国の位置を実際の地図にあてはめると、そこは海上になると放送していた。

これは、邪馬台国が架空の国であることを示す、隠されたメッセージではないのだろうか。

(ただし、邪馬台国の位置は具体的な距離が示されておらず、どのようにも解釈できるものだから、そこが海上に位置するというのも1つの解釈にすぎないのだろう。)

ここでは、邪馬台国は架空の国ではないかという仮説を提起したが、卑弥呼が実在したのであれば、どの地域に住んでいたのかという問題が生じるだろう。

そして、卑弥呼が住んでいた地域が邪馬台国である、という意味での邪馬台国論争が生じるだろう。

ただその場合は、卑弥呼の存在を証明する考古学上の発見がなされた地域が邪馬台国だということになるから、より特定がしやすくなるだろう。

なお、今後各地域の考古学研究が進展し、ある地域の研究成果が倭人伝中のほとんどの記述にあてはまるということになれば、ここで述べた仮説は説得力を失うだろう。

(今でも説得力はないかもしれないけれども。)

## 南北朝正閏論争に関して

---

宮崎哲弥の『正義の見方』（新潮OH文庫版）の中に、南北朝正閏論争に触れた個所があった。

明治国家の元老山県有朋が、南北朝並立を記述した国史の国定教科書を糾弾し、執筆者の役人を休職処分にしたというエピソードが記述されていた。

天皇を神聖にして侵すべからず存在とし、日本の統治者・主権者とした明治政府が、明治天皇の属する北朝を「正統でない皇統」とした矛盾。

なぜ、このような矛盾が生じたのか。

歴史的、現実的に考えれば幕末の時代には南朝の皇統が途絶えていたからにすぎないのだろう。南朝方の血をひいた皇族が生きていたのなら、倒幕派・維新派はこちらの皇族を担ぎあげ、大政奉還は北朝方の明治天皇ではなく、南朝方の天皇に対してなされていただろう。

維新の志士たちは、本来担ぎ上げるべき南朝の血を引いた天皇が存在していないため、やむなく（矛盾を承知で）北朝の血をひいた天皇を担ぎ上げたのかもしれない。

だとすると、なぜ新国家建設後、北朝系を正統とする新しいイデオロギーなり神話なりを生み出さなかったのかという疑問がわく。

生み出したくても生み出せなかったのかもしれないし、矛盾を解消することよりも、南朝イデオロギーを死守することの方が大事だと考えていただけなのかもしれない。

だがここで、学術的には何の根拠もない仮説（思いつきともいうが）を提起してみたい。

それは、明治国家の指導者たちは、矛盾を承知でわざと南朝系を正統な皇統であるとしていたのだ。しかもそれは、明治天皇への対応からあえてそうしていたのだ、とする説である。

明治国家の指導者たちにとっての天皇は、国民を統治・統合するための手段・道具にしかすぎず、もし天皇が自ら実権を握って親政を敷こうとしたら、その時は後醍醐天皇と同じ目にあう、その事を天皇に示すためにわざと南朝系を正統な皇統としていたのかもしれない。

山県有朋が怒ったのは、教科書に南北朝を併記することによって、北朝もまた正統な皇統であることになり、それによって天皇が実権をもつ道が開かれることになると考えたからではないだろうか。

ただし、ここで述べた仮説が仮に正しかったとしても、その後天皇のもつ権威が最大限に政治利用され、軍国主義へと雪崩れ込んでいったのだから皮肉な話ではある。

## 雑文集

<http://p.booklog.jp/book/7772>

著者：小野ユージン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/onoeugene/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/7772>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ